

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520121

研究課題名(和文) 弁論術から美学へ 美学成立における古代弁論術の影響

研究課題名(英文) From Rhetoric to Aesthetic : influence of ancient rhetoric upon birth of aesthetic

研究代表者

渡辺 浩司 (WATANABE, KOJI)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：50263182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀から17世紀にかけて、古代弁論術の用語や考え方が大きく変容していた。弁論術の初等教育の1科目であるエクフラシスは言語描写という意味だが、絵画描写という意味となった。またキケロの言う理想的な弁論家という考え方は、天才が独創によって理念を描くというアイデアの模倣という制作論へと変化した。美学そのものは、18世紀中葉にバウムガルテンによって創建された。バウムガルテンは直近の弁論術書を参照していた。またキケロの『弁論家について』の判断というメタファーも美学に影響も見られる。『美学』の内容は詩学ないしレトリックであるが、美学は「詩的哲学」であり、感性的言語の完全性をめざす諸規則の体系だからである。

研究成果の概要(英文)：Before founding Aesthetics, modern concept of arts had been formed under the influence of the ancient rhetoric. Ekphraisis, which is the description of works of art, derived from the ancient rhetorical exercise, and the concept of artists' imitating the idea was changed from Cicero's concept of the ideal rhetorician. Aesthetics was also founded under the influence of the rhetoric. Six Qualities, which give the completeness of the cognition, are similar to the clarification of argumentation of the 17th-century, not ancient, rhetoric. Aesthetics is called 'Poetic Philosophy' by Baumgarten, and it is a system of regulations conforming to the beauty.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：弁論術 美学 レトリック バウムガルテン マイアー ライプニッツ エクフラシス 修辞学

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する前年にバウムガルテン『美学』の読書会を催した。この読書会で以下のような疑問が生じた。本研究はその疑問に答えるために企画されたものである。

(1)古代ギリシア・ローマにおいて完成した弁論術は、美学の成立にとって重要な役割を果たしたとしばしば指摘される。しかし、美学成立に影響を与えた弁論術はどのようなものだったのか、その理論はキケロの弁論術なのかクインティリアヌスの弁論術なのかあるいはもう少し後代の弁論術なのかについて、美学・芸術学の観点からこれまで研究がなされていない。

(2)美学を創建したバウムガルテンの著書『美学』を読むと、そこにはラテン文学からの多数の引用が見られ、また著作自体の構成が弁論術の5部門である「発想」「構成」「修辭」「記憶」「口演」をふまえているのが分かる。美学を構想したとき、バウムガルテンは弁論術を念頭においていたと判断することができる。しかしながら、美学成立において弁論術がどのように利用されたのか、あるいは解体再編されたのかについてはこれまで研究がなされていない。

(3)弁論術が美学にとってかわったのではないかという上記の問題意識は、さらに、美学成立前後において弁論術や諸芸術についての考えが変化したという疑問にもつながる。弁論術や諸芸術についての考えの変化を調べるためには、従来の研究のように、美学成立時期の現象だけを見ては狭すぎる。もっと広く紀元前後の古代ローマから現代までという広い時間のスパンをとって考え方の変化を捉える必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、古代ギリシア・ローマの弁論術が西洋近代の美学・芸術学に受け継がれ変容していく過程を、西洋古典学および美学・芸術学の観点から、歴史的ないし理論的に究明するものである。美学は18世紀半ばにバウムガルテンによって創建されたが、美学成立において弁論術が果たした役割は大きいと言われている。しかしこれまで美学成立における弁論術の役割を具体的に解明した研究は少ない。

(1)本研究は、弁論術が美学成立において果たした役割・影響を、古代弁論術のいくつかのテーマに焦点をあてて解明することを目的とする。具体的には「エクフラシス」、「ファンタジア」といった弁論術の術語が美学成立までにどのような変化したのかということをも明らかにする。

(2)バウムガルテンが自らの美学理論に弁論術の何を取り入れ、何を取り入れなかったのか、どう変容させたのかを明らかにする。

(3)芸術についての考え方・見方が古代中世から近代にかけてどのように変化したのかを弁論術の観点から明らかにする。その際ギリ

スト教の影響も考慮に入れる。

3. 研究の方法

(1)本研究は人文社会科学系の研究であり、その基本は、関係資料の収集と資料読解である。
(2)そのさい、研究代表者、研究分担者、研究協力者が各自個別に研究を行うのはいうまでもないが、一人一人の個別の研究とは別に、年1回の割合で研究会を開催し、研究発表・共同討議を行った。

(3)またバウムガルテン哲学そのものについては松尾大先生に講話をお願いし、共同討議をした。バウムガルテン哲学に影響を与えたライプニッツについては米山優先生に講話をお願いし、共同討議をした。現代美学の問題点については秋庭史典先生に講話をお願いし、共同討議をした。エクフラシスについての美術史からの助言をもらうために岡田裕成先生と桑木野幸司先生に講話をお願いし、共同討議をした。以上の講話は講演会形式として開催し一般に公開した。

(4)さらに美学成立前後の美学・芸術思想、あるいは哲学について調査するために、美学成立直前の哲学者マイアーと美学成立後の哲学者ヘーゲルを取り上げ、「マイアー研究会」「ヘーゲル研究会」を組織し、マイアーの『あらゆる美しい学の基礎』とヘーゲルの『精神現象学』とを輪読した。

(5)交付期間中の個々人の研究分野の担当は以下の通りである。

渡辺浩司(研究代表者): 古代弁論術と美学

田之頭一知(研究分担者): 弁論術と音楽

伊達立晶(研究分担者): 弁論術と文芸

石黒義昭(研究分担者): 弁論術と哲学

井上由里子(研究協力者): 弁論術と劇

横道仁志(研究協力者): 弁論術と宗教

井奥陽子(研究協力者): 弁論術と美学

(6)交付期間中に開催した研究発表・講演会は以下の通りである。

第1回、研究会、2011年9月10日、大阪大学

渡辺浩司「中畑正志著『魂の変容』の評」

横道仁志「ボナヴェントゥラにおける三位一体論と感性論の関係」

第2回、講演会、2011年12月17日、大阪大学

松尾大(東京藝術大学教授)「バウムガルテン美学の構成要因としてのレトリック」

第3回、研究会、2012年9月16日、大阪大学

田之頭一知「日本映画における“歌”の役割
市川崑、木下恵介、黒沢明監督作品を例に」

渡辺浩司「エクフラシス 古典学と美(術史)学との間」

第4回、講演会、2012年12月22日、大阪大学

秋庭史典(名古屋大学准教授)「科学画像と美術画像」

米山優(名古屋大学教授)「ポリフォニック

なモノドロジーについて ライプニッツの美学を現代につなぐ」

第5回、講演会「エクフラシス」201年3月23日、大阪大学会館

渡辺浩司「古代弁論術におけるエクフラシス」

桑木野幸司（大阪大学准教授）「ムネモシユネの宴：初期近代イタリアの文芸・視覚芸術におけるテキストとイメージの通底」

岡田裕成（大阪大学准教授）「イメージと戯れる作法：《ラス・メニーナス》と一人称の語り手としての観者」

第6回、研究会、2013年9月4日、同志社大学

井奥陽子「修辞学の変容 バウムガルテン『美学』における文彩論の射程」

石黒義昭「18世紀ドイツ語圏と音楽」

第7回、講演会、2013年12月21日、同志社大学

松尾大（東京藝術大学教授）「レトリックにおける法廷メタファーが近代美学成立に果たした役割」

4. 研究成果

3年間に渡る本研究の成果の要旨を記す。本研究の研究組織に入っていない先生方の研究成果についてはお名前を記し、謝意を示す。

(1)「エクフラシス」には大体3つの意味があり、しばしばこれらの意味が混同されて使用されるため、「エクフラシス」をめくって美術史学や美学においてときに相反する主張が見られた。古代ローマにおいて「エクフラシス」は弁論術の初等教育の一課程であり、生き生きと出来事を描写することの訓練であった。描写される出来事は、戦争、祭り、都市などであり、しかも実際の出来事ではなくホメロス世界における空想上の出来事であった。これらの出来事を生き生きと描写する訓練が古代の「エクフラシス」であり、それはもっぱら言語表現のトレーニングであったということができる。そこには、美術史学や美学で用いられる絵画描写という意味は認められない。ルネサンス期になると「エクフラシス」は絵画描写という意味を担うこととなる。ここでは描写対象が実際に存在することが重要となり、描写そのもの、言語表現の方は副次的なものとなる。たとえばヴァザーリは絵画作品を実際に見て、『ルネサンス画人伝』を記した。近代の「エクフラシス」はこの意味での描写ということができる。そして美術史学が確立した現代においては、研究対象となる絵画作品の記述は、学の基礎を支える重要な作業である。この作業も言語による絵画描写であり、「エクフラシス」と呼ぶことができる。以上のように「エクフラシス」には大きく3つの意味が認められた。そして、近現代の意味でのエクフラシスを古代の絵画論に持ち込み、近現代の観点から古代の絵画論を読み解こうとすることは慎まなければならない。「エクフラシス」という言

葉は、絵画が芸術として確立していくとともにその意味を変えていったのであるから。

(2)キケロ『弁論家』は、古代ローマにおいて理想的な弁論家とはどういう人なのかを説いた弁論術書である。理想的な弁論家とは、完全な弁論家とも言われ、理念的な弁論家像のことであり、この世に実際に存在するわけではない。キケロは、完全な弁論の理想像を、フェイディアスの彫刻を例に引き説明し、理性によって把握される「アイデア」と呼んでいる。ここでのキケロの「アイデア」理解は、プラトンのアイデア論とアリストテレスのエイドス論との折衷であり、プラトンのアイデア概念に「観念」としての意味をもたせている。プラトンの「真実在」という意味に加え「観念」という意味が付加されたキケロの「アイデア」概念は、後世の造形理論に大きな影響を与えた。17世紀のペッローリは、キケロの『弁論家』を引用して、神と同様に画家や彫刻家は心の中に形成したアイデアを吟味して作品をつくるべきであり、アイデアは単なる観念ではなく、永遠に最も美しく、最も完全なものだと言っている。ここにおいて、プラトンの「アイデア」を造形作家が模倣すべきだという主張が整備され、フランスやドイツやイギリスの古典主義の基盤となった。ペッローリによって主張された、アイデアの模倣という制作論は、ドライデンの「絵画と詩の比較」において、「天分」や弁論術の「発想」概念や模倣対象（オリジナル）といった諸概念と融合して、「天才」、「独創性」、「オリジナリティー」という意味へと変容した。ドライデンの考えはロマン主義を準備することになる。以上のように、プラトンの「アイデア」が、キケロ、ペッローリをそしてドライデンを経て、「アイデア」という概念に変容した可能性が高いということができる。古典主義もロマン主義も、キケロの『弁論家』に由来しており、キケロの『弁論家』こそ、近代芸術の重要な源流と見なされるべきである。

(3)バウムガルテンは美学を定義して、「感性的認識の学」といった。しかしその内容は詩学および弁論術から強く影響を受けたものとなっている。したがって、バウムガルテンは、本来美学で扱うべき感性的認識と感覚能力や想像力という下位認識能力とを論じていないという批判が今日まで続いている。「感性的認識の学」という定義と『美学』の内容との間には大きな隔たりがあるというわけである。しかしながら、「感性的認識の学」は感性的認識を完全にする学であり、知性の使用を教える学である論理学との類比の上に成立している以上、感性的認識を完全にする学としての美学は、美へいたるために下位認識能力を使用する規則を教える学である。下位認識能力そのもの、下位認識能力の働きを分析することは美学の役割ではない。「感性的認識の学」には感性的認識を獲得することと叙述ないし表示することの学 という意味が込められている。

認識と叙述は伝統的な弁論術における思考内容と言語表現に由来するものであり、感性的認識と感性的表示の学としての美学は、文芸や絵画などにおいて着想を得て表現することに関する学を意味する。美学は「詩的哲学」ないし「普遍的レトリック」として構想された。古来弁論術は論理学と類比的に捉えられてきたので、美学もこの伝統に則って構想されたのである。「感性的認識の学」という定義が以上のように理解されるならば、詩学および弁論術を手本として美学を展開することに不思議はない。「感性的認識の学」という美学の定義と『美学』の内容との間に、大きな隔たりがあるわけではない。

(4)バウムガルテンは、認識の完全性を与えるものとして6つの質(豊かさ、大きさ、真理性、明らかさ、確かさ、生命)を挙げるとともに、これらの質は、「論証」の分類とも述べている。『美学』のテキストは、これら6つの質をそれぞれ扱う部分に大きく分かれ、6つの質に多数のフィギュールを配分することによって織りなされている。従来これら6つの質は古典弁論術に由来するものと解釈されてきたが、6つの質の分類とその各々へのフィギュールの配分という思考形式に似たものはむしろバウムガルテンの直近のレトリックのテキスト(アルステッド、ハルバウアー、ファブリキウスらのテキスト)に見いだされる。『美学』は、これらのレトリックのテキストにきわめて多くを負っていると見える。しかし6つの質を一定の秩序で並べるというシステムはバウムガルテンに独自のものである。(松尾大先生の研究)

(5)芸術作品の価値についての判断を説明するために、法廷における判決を、法廷メタファーを持ち出す。批評に関する近代の議論は一般に法廷メタファーを用いている。批評に関する議論に接続するバウムガルテン美学も法廷メタファーを受け継ぐ。批評に関する近代の議論がキケロを絶えず参照していたのと同様、バウムガルテンもキケロを絶えず参照する。したがってバウムガルテン美学はこの意味でもレトリックの直系の子孫ということが出来る。法廷メタファーに専門主義と非専門主義という対立軸を設定すると、バウムガルテンは非専門主義に近い位置にいる。(松尾大先生の研究)

(6)バウムガルテンが『美学』を世に出す前に、G. F. マイヤーが『あらゆる美しい学の基礎』という著作を刊行し、美学を世に問うた。この著作の序文を読むだけでも、美学が成立したときに相当のもめ事があったことが分かる。それは、バウムガルテンの許可を得た上ではあるが、バウムガルテンによる美学の講義をもとにマイヤーが、美学についての著作を刊行したからである。美学を構想したのはバウムガルテンであり、美学の著作を初めて刊行したのはマイヤーである。このねじれた関係が当時から問題になっていた。そして美学という学問そのものについても疑惑の目

が向けられていた可能性が高い。カントが美学という用語を用いなかったのは有名であるが、美学という用語にまとわりつくごたごたがあったからだと考えられる。

(7)研究代表者は、エクフラシスを好んで用いたローマ帝政期のギリシア語作家であるルキアノスを邦訳した。邦訳したのは、『女神たちの審判』、『お傭い教師』、『アナカルシス』の3編で、京都大学学術出版会から『ルキアノス全集4』としてこれを刊行した。『お傭い教師』はエクフラシスで終わっており、今回の邦訳により、古代ローマにおけるエクフラシスの実際を世に提示することができた。

(8)交付期間の3年間で得られた研究成果は、『弁論術から美学へ 美学成立における古典弁論術の影響 平成23年度～平成25年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書』(渡辺浩司・田之頭一知編著)という冊子体の報告書にまとめて世に問うた。

(9)最後に、まだ発表していない研究成果であるが、弁論術と美学とが共有する点、あるいは美学が弁論術から受け継いだ点が明らかになった。共有する点ないし受け継いだ点とは、共通感覚、Common Sense、常識である。訳語はいろいろあるが、古代ギリシア・ローマの弁論術が大前提としているものに人々の常識がある。弁論術は、論理学のように大前提を提示し、そこから証明を導き出すわけではない。弁論術は、大前提を提示することなく、むしろ人々の常識に訴えかける。いいかえれば人々の常識が論理学にとっての大前提となっているのであるが、それは語られることも明示されることもない。美学は、そもそも趣味についての学問であり、人々の趣味ないしセンスを問題とする。上品な趣味の人もいるし、センスの悪い人もいるが、それはなぜかを美学は問う。そしてどうすれば上品な趣味の持ち主になれるのか、どうすればセンスのいい人になれるのかを美学は問う。そこに見られるのは、趣味ないしセンスが確実に個々人に備わっているということをも美学が前提としている事態である。弁論術が大前提とする常識が、近代人の趣味という考え方に形を変えて受け継がれているといえる。この点については、まだ調査研究をする必要があり、発表するのを控えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

渡辺浩司、「エクフラシス ローマ帝政期における弁論教育」、『弁論術から美学へ 美学成立における古典弁論術の影響』(平成23年度～平成25年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者:渡辺浩司)研究成果報告書)査読無し、2014年3月、7-15頁。

伊達立晶、「推論形式と芸術運動 西洋

近代芸術再考の試み」、査読有り、2013年3月、『人文学』第191号、同志社大学人文学会、1-29頁。

石黒義昭、「ドイツ教養市民とフルトヴェングラー」、査読有り、2013年10月、奈良芸術短期大学編、『研究紀要 平成25年度』、48-65頁。

TANOGASHIRA Kazutomo, "Music as Silence, Cinema as Dream: Toru Takemitsu's View of Film Music", Refereed, July 2012, *Papers: International Symposium on Theories of Art / Design and Aesthetics, 19-21 October 2011*, Antalya: Akdeniz University, pp.308-314.

〔学会発表〕(計4件)

TANOGASHIRA Kazutomo, "Reconsidering the Film Music of Toru Takemitsu: From the Viewpoint of the Relationship between Sound and Nature", The 19th International Congress of Aesthetics—Aesthetics in Action, 21-27 July, 2013 (the Polish Society for Aesthetics & the International Association for Aesthetics), Jagiellonian University, Krakow, Poland, 26th July, 2013.

渡辺浩司、「古代弁論術におけるエクフラシス」、エクフラシス研究会、於大阪大学、2013年3月23日。

伊達立晶、「『夏の夜の夢』における「イマジネーション」概念再考 創造的イマジネーション概念の成立をめぐる」、文芸学研究会(第46回研究発表会)、於同志社大学、2011年12月25日。

〔図書〕(計5件)

田之頭一知、晃洋書房、『カルチャー・ミックス 交換の美学序説』〔同志社大学人文科学研究所研究叢書 XLVII〕(岡林洋編著)担当箇所:『想像的自然と映画における音楽 武満徹の映画音楽観再考』、2014年3月、147-165頁。

渡辺浩司・木曾明子訳、法政大学音楽研究所、メイ・スメサースト『ギリシア悲劇と能における「劇展開」の比較研究に向けて』、2014年3月、総頁171。

渡辺浩司訳注解、京都大学学術出版会、『ルキアノス 偽預言者アレクサンドロス全集4』、担当箇所:『女神たちの審判』『お傭い教師』『アナカルシス』、2013年2月、3-85頁。

石黒義昭、角川学芸出版、『新しい時代をひらく 教養と社会』(寄川条路編著)担当箇所:『芸術経験と教養 自己形成としての芸術』、2011年12月、173-201頁。

渡辺浩司、角川学芸出版、『若者の未来をひらく 教養と教育』(寄川条路編著)担当箇所:『古代の教養から ギリシアからみえるもの』、2011年12月、123-150頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究成果の(8)で記した通り、3年間の研究成果は冊子体の報告書にまとめて刊行した。その目次は以下の通りである。

はじめに.....渡辺浩司

論文

エクフラシス.....渡辺浩司

近代芸術の源流としてのキケロ『弁論家』(9-10).....伊達立晶

ポナヴェントウラの三位一体神学における弁論術の意義.....横道仁志

バウムガルテンはなぜ詩学・レトリックを美学のモデルとしたか 「感性的認識の学」という美学の定義をめぐる.....井奥陽子

Imaginative Nature and Music in Cinema: Reconsidering Toru Takemitsu's Views on Film Music.....TANOGASHIRA Kazutomo

邦訳

G. F.マイアー『あらゆる美しい学の基礎』冒頭部分.....井奥陽子、石黒義昭、渡辺浩司訳

講演会から

バウムガルテンの『美学』の基本構造の淵源としてのレトリック.....松尾大

ポリフォニックなモノドロジー(多声的単子論)について ライブニッツの美学を現代につなぐ.....米山優

レトリックにおける法廷メタファーが近代美学の成立に果たした役割.....松尾大

編集後記.....田之頭一知

(2)以上の冊子体の報告書は、大阪大学附属図書館のリポジット制度を活用し、執筆者の了解がとれた論文を電子化し公開する予定である。

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡辺 浩司(WATANABE, Koji)

大阪大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：50263182

(2)研究分担者

田之頭 一知 (TANOGASHIRA, Kazutomo)

大阪芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：40278560

伊達 立晶 (DATE, Tatsuaki)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：30411052

石黒 義昭 (ISHIGURO, Yoshiaki)

大阪歯科大学・歯学部・非常勤講師

研究者番号：40522785

(3)連携研究者

なし

研究協力者

井上 由里子 (INOUE, Yuriko)

立命館大学・非常勤講師

横道 仁志 (YOKOMICHI, Hitoshi)

大阪大学・大学院生

井奥 陽子 (IOKU, Yoko)

東京藝術大学・大学院生